慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 一七八九年のフランスに於ける貴族階級 |
| Sub Title | |
| Author | 小泉, 順三 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1934 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.2 (1934. 2) ,p.209(29)- 243(63) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19340201-0029 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340201-0029 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

註三八　H. Sultan, Die reine "Theorie der Staatswirtschaft und Besteuerung" und die Finanzsoziologie, Archiv für Sozialw. u. Sozialp. 59. Bd. S. 150

註三九　E. R. A. Seligman, The social theory of fiscal science, Political Science Quarterly, vol. 41, pp. 194-195

註四〇　Seligman, op. cit., p. 194

追記――私は、はじめ、問題をもつと包括的に取扱ふつもりで筆を執つたが、餘りに長くなるのを恐れて一往擱筆することにした。殊にゴオルドシャイドの財政社會學に關する部分では、彼れの學説の基礎となる「人間經濟」の理論に就いて説明を加ふべきであつた。他日補論を書き度く思つて居る。（一九三四・一・一三稿）。

# 一七八九年のフランスに於ける貴族階級

小泉順三

目次

一　貴族は君主政の本質に入る
二　貴族は如何にして君主政を崩壞せしめたか
三　貴族の奢侈
四　貴族の生活資料は何處から來るか
五　貴族とブルジョアジーの接近
六　貴族は國家財政に寄食す
七　宮廷貴族と鄉土貴族の對立
八　生活及思想を異にする兩型の貴族
九　第三の民主的貴族
十　結論

## 一　貴族は君主政の本質に入る

モンテスキューは云ふ。

「從屬的な仲介的權力が君主政體即ち一人が其基礎法により統治する政體の性質を形造る。余は從屬的な仲介的權力と云つたが、まことに、君主國では君主がすべての政治的並に市民的權力の源泉である。これらの基礎法は必然的に權力の通ずべき中間の道路を豫想する。

なぜなら若し、國内に一人の瞬時的な氣紛れな意志しかないとすれば、何ものも固定的であり得ず、從つて又何等の基礎法もあり得ないだらうから」と。（モンテスキュー、法の精神、第二篇第四章）

此附屬的仲介的權力の中最も自然的なものは貴族の權力である。つまり貴族は君主政の本質の中に入るものである。

實に「君主なければ貴族なし、貴族なければ君主なし」とは兩者の關係を觀破したモンテスキューの名言であつたのである。

これによつて我々は、フランスの歴代諸王が一方に貴族僧侶を抑止しながら、他方に於ては、彼等を共同の利益配分者と見做して之を庇護するの態度を執つた眞因が那邊に存するかを略〻知る事が出來る。

果して、モンテスキューの言の如しとすれば、君主政に於て、領主、僧侶、貴族等の特權を廢止する試みは君主政をしてやがて民衆國家か、專制國家かの何れかに變ぜしめるものと云はねばならない。モンテスキューは、この經過についても次の如く言及してゐる。

「歐洲のある國に於てすべて領主の裁判權を廢止しやうと考へた人達がある。彼等はそれが英國の議會の行つた事をしやうとするものであることに氣がつかなかつた」と。何となれば、英國人は自由を助成するために、共和政を確立するために、其君主政を形成して居つた仲介的權力を廢止したからである。

一七八九年のフランスに於ては、この種の企が成功を見つゝあつたのである。即ち、シイエースによつて代辯された第三階級は三民議會に於て、領主、僧侶、及都市の特權を正式に廢止して、民衆的國家をつくらうとして居つたのである。一七八九年六月二十六日のアーサー、ヤングの手記には、この意志が明白に記述されて居る。「あらゆる階級の人々によつて話された言葉は、政府の改革、自由なる憲法の樹立に外ならなかつた。そして、彼等が自由なる憲法と云ふ意味は容易に了解される――即ち共和政である」と。

一七八九年はフランス王政の解體期であつた。

本稿に於ては、このフランス王政の解體期に於ける貴族階級について論じたいと思ふ。

## 二　貴族は如何にして君主政を瓦壞せしめたか

然らば、當時の貴族は何故に君主政を解體に迄導いたのであるか。

他なし。彼等は彼等がよつて以て君主政の本質に參加する唯一の職能たる仲介的職務を怠つたからである。

貴族の仲介的職務、換言すれば、貴族は「其礎法が必然的に權力を通ずべき中間の道路」であると云ふ事は、公務を行ふのみならず、又輿論をつくり、社會の指導原理に權威を與へることを意味する。

然るに貴族に與へられたかゝる優秀にして高雅な職任は、十八世紀より遙か以前に、フランスの貴族の頭腦から全く亡失して了つて居つた。彼等は、公共の安寧、人民の幸福については、些も注意を拂はぬ全くの不生産的團體として、徒らに社會の上層地位を保持して居るにすぎなかつた。從つて與へられ且維持されて居つた形式上の特權

を度外視すれば人民の彼等に對する信用や、彼等が社會に對する勢威は俱に喪失して、彼等が民心に於て占めて居つた場所は全く空席にすぎなかつた。(Tocqueville, Ancient regime and the French revolution, p. 174)

然らば、彼等は何に對して忠實であつたか。

貴族が最も忠實に履行したものは、モンテスキューの掲げた他のもう一つの君主政に於ける原理に對してであつた。

この原理とは、「君主政に於ては必ず奢侈が行はれなくてはならぬ」と云ふ格律である。然し、この原理に忠實であるといふ事は頗る危險であつた。實に、フランス王政を危くしたものはこの奢侈であつたのである。奢侈は不生産者の亂行であるからである。

モンテスキューの意見によると、「君主政に於ては、其憲法上、富は不平等に分配されてゐるから——若し富者が多くを費消せぬならば、貧者は餓死するだらう。——否、富者はその財産の不平等に比例して費消しなければならず奢侈は——その比例に於て增大しなければならぬ」。もつと突込んで云へば、「個々の富が增殖されるのは、偏へに一部の市民から、其生活必要品を奪つたからだ。從つて、それを彼等に返さねばならぬ」。(モンテスキュー、同上、第七篇、第四章)

モンテスキューは、この奢侈を禁止すべきか、奬勵すべきかについて尙考究を續けてゐる。曰く、尤も「奢侈を奬勵すべきか、禁止すべきかを知るためには、先づ人口數と其生活資料との間に於ける關係に目を注がねばならぬ」。支那の如く女子が非常に多産で、人口が速かに增加し、土地がいくら耕作されても、其住民を養ふに足りぬ樣な國では奢侈は危險である。然し、英國やフランスの如く、土地が、耕作するものと、工場勞働者を養ふに充分な穀物を產出する所では毫も有害ではない。

彼はそこで、次の如き愉快な結論を導いた。「故に、君主國が維持されるためには、奢侈は農夫から職人へ商人へ貴族へ官吏へ大領主へ、大收稅請負人へ、君主へと自然に增加して行かねばならぬ筈である」と。(同上、第七篇第四章)

然し、モンテスキューが導いた直截的な此の結論が、其儘行はれるとするならば、そこには、彼が豫期したと反對の結果が生じなければならなかつた。何となれば、彼の希望する奢侈が、自ら生產せず働かずして、たゞ、働き生產する人民よりの、搾取によつてのみ肥大してゐる貴族によつて、最も大なる比例に於て行はれるならば、彼等の奢侈は其程度が增加するに從つて、そのために搾取される階級を愈々貧困に陷れるからである。從つて、「個々の富が增殖したのは偏へに一部分の市民から其生活必要品を奪つたからだ。從つて、それを彼等に返さねばならぬ。富者が多くを費消しなければ貧者が餓死する」と云ふモンテスキューの推定に反して、奪つたものに返却する所か、更に、其掠奪を重ねる結果を生まねばならなかつた。

フランスに於ては、事實かくの如き結果を見たのである。貴族の奢侈生活は、たゞ多くの貧者をつくり、其上、彼等を飢餓の境に彷徨せしめる結果を生んだにすぎなかつた。そして、他方には、貴族が徒らに費消したものを受取つて愈成長し、肥大して行く他の一新階級を形成せしめたのである。生產的にして奢侈を好む階級即ち當時の第三階級中のブルジョア階級の成長がそれであつた。この階級こそ、やがて貴族に代るべきものであつた。されば、そ、既にこの消息を觀察したミラボー侯は、當時、其著「人民の友」に於て「彼等が其城に於て送つてゐる生活によつて、大領主は農夫を亡し、且自らを亡した」といふ彼の觀察を人々に示してゐたのである。

「一七八九年のフランスに於ける第三階級」に於て述べた如く（三田學會雜誌、第二十三卷第五號）町人階級の勃興を革命の眞の原因とするならば、これを成功せしめる助因は、君主政體の中にかくの如く明白に活動して居つたのである。

## 三　貴族の奢侈

とまれ、貴族は、十八世紀に於ける特權階級の特徴と考へられてゐた放恣贅澤の生活と、かの華麗さに自らも眩惑を感ずる程の盲目的浪費の、極彩色の繪を展げたのである。

彼等の奢侈を一層壯んならしめたものは中央集權の勢の增大であつた。封建的勢威を日に日に失つて行く貴族には、臣下の主に對する勤勞としてのヴルサイユ出仕が、彼等の缺くべからざる務の一つとなつた。從つて、彼等の不在は君主の目に獨立の徵候として又王に對する侮蔑の標として映つた。しかも、「起床にも、就寢にも、食事にも、入室にも、庭園逍遙中にも、四方に廻轉してゐるルイ十四世の眼からは、何物も逃れる事が出來なかつた」。宮庭を不斷の滯在所とせず稀にしか來伺せぬものには、最も家柄の高いものでも、王の御覺え目出度なかつた。全然、或は、殆ど參候せぬ輩に至つては、當然甚だしい王の勘氣を蒙つた。新宗敎の寺院たるヴルサイユ宮殿に鎭座する王は、日日の敬虔な參拜を最も喜納し給ふ神であつた。

この出仕家族は四千、數にして約二萬人を示すに至つた。從つて、此の數を制限するために、千四百年以上に溯る事の出來る家系に屬してゐなければ出仕出來ぬといふ勅令が一七六〇年に出されるに至つた。若し、この掟が嚴重に施行されると三分の一以上の貴族が除外されねばならなかつた。然し、實際は王の裁量にのみ委されて居つた。ルイ十五世は、一七七四年に、出仕はたゞ王のみが決定すべきものとしたがルイ十六世の時代には、實際には、かつてない程大多數の宮庭出仕が行はれた。しかもこの宮廷貴族の數は毎日增加して居つた。地方の貴族は特にこの榮譽を切望した。何故かなれば、これは單なる光榮に止らなかつた。それは軍隊に於て、特に偉大な利益を與へられた。若し調見しなかつたならば、大佐級を超える事は難かしかつたのである。しかも士官の大部分を占めて居つたものはこの種の貴族であつた。

かくて、ヴルサイユの出仕は貴族をして愈々都會化せしめ、王に習つて、或は王に競つて、自己のサロンと、服裝と饗宴の派手やかさと建物の廣大さを誇らしめたのである。

王を中心としたヴルサイユの燿眩たる豪奢を思ふには、テイヌの麗筆が最もふさわしい。

テイヌは「試みにパリーからヴルサイユへ、歷々として日夜江河の如く續く車列の跡を追ふて見給へ」と云ふ。「最初の一瞥で吾人は恰も突然そつくり建設された一種特別な都會に來た感じがする」と。

ヴルサイユは、徒らに八萬の人口を有し、王國内の最大都市の一つであり、單なる一個人の生活で滿し、殖され占められてゐる。それは、全く、王の必要、娛樂勤務、藝術、社交、衒燿に資する樣特に調へられた一箇の王邸であつた。名流貴族は、この周圍に各自の邸宅を構へてゐた。そして、この邸は華麗な、建物の花冠を形成し、其處から每朝、同數の金色の蜂が飛出し、凡ての富と光の中心であるヴルサイユに來て、花を漁り、羽を揮かしたのである。

この黃金の蜂は、王の好意ある一瞥をうるがためには日頃の傲慢さも打忘れる程卑屈にはなつて居つたが、何れも選り拔かれた、そして、血統、敎育、身代、余裕、習慣の與へる優美の點に於ては、めでたい迄に惠まれた人々であつた。そして、その供奉や飾りは明らかに、其人物の主要なる一部を形成して居つた。從つて、出來得る限り

豐富と華麗とを競はなかつたならば、それこそ彼等の缺陷と目された。當時の手記は如何に彼等が其衣服調度に於て奢侈を極めたかを物語つてゐる。女と服裝の美を競つた男が舞踏會の衣服のために千五百リーヴル、二千リーヴルを支拂つたのは珍らしい事實ではなかつた。若し、彼等が其本領を忘れて、强いて節約するならば、當然其の名聲を墜した。さればこそルイ十六世が改革を行つた時、滿庭は、王に對して町人の眞似をすると云ふ嘲笑を投げ交したのである。

かやうに、宮庭に於て「ペルシャ王の使ふ無比の香水の一オンスをつくるために必要とされた十萬のバラにふさはしく」振舞つた貴族は、其の邸宅に歸つても、奢侈實行の務には尙忠實であることをやめなかつたのである。美麗の馬、時には天鵞絨を貼り繪畫を施した華麗な四輪馬車、部屋付の女中や家扶の外に三十人或は四十人の家僕も、その生活に相應しいものとして設へられて居つた。彼等の生活についてデイケンスは次の如く書いてゐる。

「宮庭で權力のある大貴族の一人モンセエニュールは、巴里の大邸宅で二週間毎にやる接見をして居た。表の幾間かに控えてゐる崇拜者の群にとつて、最も神聖なるものである奥の一間にゐたモンセエニュールは、今そのチョコレートをのむ所であつた。モンセエニュールは、いろ〳〵のものを、やす〳〵と嚥み下す事が出來た。殊に、二三の不平家からは、フランスそのものをさへ、手取ばやく嚥下してゐるやうに取沙汰されてゐた。だが、彼の毎朝のチョコレートは料理番の外に四人の屈强な人間の手を借りなければ、なか〳〵モンセエニュールの咽喉には這入り兼ねるのであつた。

――かういふチョコレート侯の侍者の中、一人缺けても、この讃美に充ちた、天が下での高位を維持することは不可能であつた。若し、彼のチョコレートが、不名譽にも、僅か三人の侍者に依つて給仕されることがあつたら、それは家紋にとつて深い汚辱となつたであらう。若し侍者が二人となつたら彼はきつと死んだに違いなかつた。

モンセニュールは、どこまでも御愛想がよく、感動し易いたちだつたので、コメデイやグランド・オペラは、退屈な國事問題や國家の機密に携はつてゐる彼にとつては、全フランスの窮乏よりも遙に大きな影響を及ぼした」と。（柳田泉譯、二都物語、一〇二頁）かくの如くであるから、彼等の社交生活に於て饗應、舞踏、觀劇、狩獵その何れに於ても少なからぬ金が費されたのは當然であつた。一七四九年にサン、トウエンに王を招じたスウビイス公の晩餐には少なくとも、二十萬リーヴルが費されて居つた。又ショアジュールは巴里に於て、シャンテロープの別莊に於て毎夜食卓を公開して饗應と音樂とに耽つたが、このために八十萬リーヴルに及ぶ其收入も、これを償ふには足りなかつた。

彼等が、その居城に於ける生活も、又、巴里人としてのその生活に優るとも、決して劣るものではなかつた。試みにブリエンヌ伯の居城の華麗さをしるして見やう。

「菩提樹、紫丁香花、芝草で緣とつた細長いアベニューを通つてブリエンヌ城に著いた。中央の路に沿ふて、美しい部屋々々、八十人も容れる食堂、通りと庭とを見下ろす大サロン、玉突部屋、廻廊の書庫、自然歷史室、實驗物理學室、舞踏室になる劇場（若し舞臺を平土間と平均にすれば）があつた。地下には、家僕等の舞踏屋があつた。尙中央の路に沿ふて伯爵夫人の部屋があつた。城の前には中庭に隣つて二つの大なる層樓があつていくつもの部屋に分れて居つた」。貴族の奢侈についてはこれ位で筆を止めやう。要之、貴族達は、其莫大な支出によつてモンテスキューの云ふ君主政の必要行爲たる奢侈の務を完全に果して居つたのである。

## 四　貴族の生活資料は何所から來るか

然らば、ここに新らしい疑問が生れる。それは貴族のこのおびたゞしい生活資料が何所から來たかと云ふ疑問である。

眼をあげて見給へ。貴族の周圍の何處に生産的機能が備へられてゐるかを。

先づ、彼等の手足はどうか。其個人的技能は如何、彼等は、個人的技能のみが決定する範圍の競爭には、久しい以前から、あまりに怠惰に、且あまりに不適當な性格と習慣との所有者となつて居つた。

然らば當時勃興しつゝあつた産業的生産方面に於ては如何であつたか。

貴消する事に專らなる人間が、つくり出すことに巧みであるとは、誰しも期待しないであらう。彼等が新しい生産方法に適應するには、當時のブルジョア階級に比較して完膚ない迄に劣等であり、不器用であつた、ことは云ふ迄もなかつた。彼等は、當時の資本主義的製造品たる商品に對して、金を使用する方法については、暫時にして骨を覺えたが、自己の收入を物品の賣買によつて、換言すれば、羊毛、穀物、火酒等の取引によつて高めることは、全く彼等の了解しうる限界の外に置かれてあつた。

彼等は當然、彼等のよく使用し慣れた財源、即ち封建的收入に賴らざるを得なかつた。

彼等の封建的所得は幾許であつたか。

この收入たるや、王族及堂上貴族にとつては少なからぬ金額であつた。十萬から十五萬リーヴルの收得はこの階級に於ては普通の事であつた。中にもオルレアン公は一七五三年には三百萬、オルレアン家はルイ十六世の時代には、ペンテエブル家のそれと合して、約八百萬の年收、コンデ家は百五十萬、コンティ家のそれは六十萬と推定されてゐる。この外ヴィロン公及アルテマール公の五十萬、シュヴリュース公の四十萬、グラモント公の三十萬、トレモイユ公の三十萬、ヴィレット侯の十五萬の年收も、少からぬ彼等の收入の例證としてあげる事が出來る。

然し、この封建的收入は、彼等にとつて全くの不勞所得であつた。自ら勞せざる所得に對しては、何人も善良にして思慮深い管理者たり得ない。不勞所得こそは、奢侈に對する最も良き源泉であつた。それは、前章に於て述べた貴族の奢侈生活に對して、正しく適合した財源と云はねばならなかつた。

然るに、この不勞所得を産み出す事を餘儀なくされたものは、封建的束縛によつて領主と土地とに固く結付けられて居つた農夫であつた。貴族が、自己の不勞所得に對して不足を感ずるに從つて、農夫に對する不滿の度は當然嵩じた。換言すれば、彼等の手許の窮迫する毎に、彼等の貧困の度が增加するに從つて、農夫に對する彼等の要求は增々大となり、益々無慈悲とならざるを得なかつた。農民窮迫の原因はここにあつた。（三田學會雜誌、第二十三卷、第十二號參照）、

然し、貴族は、その封建的收入が彼等に充分の滿足を與へない場合には、一方農夫に對して請求の度を强めると同時に、他方に他の應急手段をとる事が出來た。その結果は後に更に甚だしい貧困の原因となるものであつたが、それは借金であつた。

貴族の負債が急速に增加したことは勿論である。何故かなれば、奢侈の要求する丈はこれで補はねばならなかつたからである。

彼等は何處から借りたか。彼等が借金するところは外ならぬブルジョア階級であつた。この階級に對して、彼等は心中では頗る輕蔑して居つたのではあるが、現下の必要のためにはその輕蔑の色も心中深く祕めて居なければならなかつた。

最も富める者すら借財によつて家計を支持して居つたと云ふ例を擧げるならば、ブルボン公及カリニヤン公は、其死に際して、各々五百萬リーヴルを、又一七五〇年頃ダンタン公は九十萬リーヴルを、ショアジュール公は一七八五年に六百萬リーヴルの負債を有して居つたと云はれてゐる。（H. Sée, La France economique et sociale au XVIIIe siécle, p. 81）

借財による生活標準の維持は、上流の貴族に於いて既にかくの如くであつたのであるから、中流下流の貴族に於ては、如何に貧困が甚だしかつたかは直ちに了解し得る。一州知事の曰く「この州に於ては、現世紀の始め、數千の貴族があつたが、全數の中で二萬リーヴルの收入を有するものは十五人であつた」と。更に甚だしい事實ではあるが、その土地から得る收入が五十リーヴル、さては二十五リーヴルを超えないところの多數の貴族の家庭も確に存在して居つたのである。

彼等のこの窮迫は、彼等をして更に新しい他の方法によらしめた。それは土地財産の全部或は一部の賣却であつた。これを購入しうるものは、精勵なる百姓と富裕なるブルジョア階級であつた。

細分された土地は殆ど農民に賣られた。然しこの賣却は、決して農民に全部の權利を讓渡しはしなかつた。其土地に關する領主的特權は依然として保留された。チュルゴーの記す所によれば、リムーザンの如き州では、土地を所有してゐないで、この領主權から生ずる收入と地代とによつて生活してゐる小貧乏貴族が充滿して居つた。

廣大な土地を買入れたものはブルジョア階級であつた。これは、この新地主が舊領主と對立して農村に其權威を振ふやうになつた事實を示した。

思ふに、借財は一時凌ぎであつて直ちに其辨濟を伴ふ。貸借關係によつて富を取得するものは何時の世に於ても貸主であつて、借主でない。借財は其額丈或は其額以上に其の借主に貧困を負はしむるものである。他人の手にある限り、其金額に利子を産ませて、常に其元金を超過せしめるところに新興ブルジョア階級の隆興すべき理由が存した。

以上を要約すれば、我々は貴族の貧困が二つの主要な結果を産んだ事を知りうる。一はブルジョアジーと都會貴族の接近であり、他はブルジョアジーの勢力が貴族階級に對立して農民に浸入した事實であつた。こゝに於て暫時ブルジョアジーと貴族との交渉について述べなければならぬ。

## 五　貴族とブルジョアジーの接近

階級混淆の形勢が著しく目に見えて來たのは、モンテスキューによれば、ロウの奇怪な企業以來特にさうであつた。然し、この形勢そのものはずつと前からあつたので、ルイ十四世の時に書かれたモリエールの喜劇は――極めて興味ある現象であるが――當時の貴族が富有なブルジョアジーを輕蔑しながら、同時にそれに寄生して居つたことを我々に示してゐる。

勿論、宮廷貴族は、出來得る限り、仕立屋や手袋職人風情には傲慢の態度を以て接した。又職人の方にあつても、高貴の人々のために働きうることを己の榮譽と心得てゐた。從つて、彼の勞働に對する支拂を要求するのは厚顏しく僭上な沙汰と考へて、おづ〳〵これを要求して居つた。

然るに彼等の大ブルジョアとの交渉は全く之と趣を異にして居つた。云ふ迄もなく、貴族は貧困にはなつたが、その法律上の地位には何等の變動も受けて居なかつたのであるから、法律上に於ては、彼等が有力なる支配階級であることには些も變りはなかつた。從つて彼等はブルジョア階級を被支配階級として到る所で引續き侮蔑をすること

とは出來た。然しそれは法律上の事のみであつて、彼等が有する法律的特權も、實際上に於ける權力の推移に對しては全く無力と云はねばならなかつた。換言すれば、ブルジョア階級は貴族が一番必要とする金を極めて豐富に所有して居つたのである。洵に、これこそ兩者の間に於ける唯一にして實際の狀勢であつた。

從つて、金による貴族の運命は全く彼等の掌中にあつた。貴族を破產せしめることも、脅かすことも、彼等の勝手氣儘に行ふことが出來た。極言するならば、「ブルジョアジーの手中に土地所有に反對である動產の富がつくり出され、蓄積せられる事によつて、貴族は全然、意義なきもの、否、既に此の富有となつたブルジョアジーに眞に隸屬するものに引下げられて居つたのである。」（ラッサール、小泉信三譯、勞働者綱領一七頁）

かくの如き有力な階級に對して貴族が內心輕蔑しながらも、あまり暴慢な態度で接する事の出來なかつたのは當然であつた。ルイ十四世すら然りであつた。彼はかつて宮廷環視の前に於て、ユダヤ人サムエル、ベルナールに對して脫帽して王侯に對する如く挨拶した。其理は明白である。其男は六千萬の大金持であつたからである。從つて貴族は王よりもブルジョアジーに對して尊大であり得なかつた。大ブルジョワジーは益々貴族に似て行き、貴族は益々大ブルジョワジーに似て行つた。

しかも關係はたゞ彼等の外貌上の類似點を增したり、深めたりしたに止まらなかつた。それ以上に親しく結ばれて行つた。即ちブルジョワジーが金で貴族の稱號を買へば甚だ貧窮した貴族は、彼の錆びた紋楯を最も新米の富豪貴族の女と結婚によつて金鍍金しやうとさへ努力したのである。そこでブルジョアジーは外戚として、貴族のサロンに現はれる事が出來た。

こゝで再び、長きに亘るけれども、ディキンスの筆を借用しやう。

「モンセニュールにも、次第に公私二つともにその財政にはいろ〳〵な下らぬ困難が這ひてんで來てゐるのに氣が付いた。そこで、彼はその兩種の財政について、已むを得ず租稅請負人と結托した。

公の財政については、モンセニュールは全くそれをどうすることも出來なかつたので、誰かそれをどうにか出來るものに任さなければならなかつたし、彼自身の財政について云へば、租稅請負人は金持であり、モンセニュールは積年の贅澤沙汰と多額の失費のためにだん〳〵貧乏になつて來てゐたからである。そこで、モンセニュールは彼の妹を彼女がつける一番安直な衣服――つまり尼服――の差迫つた着用をまだ斷る間のある中に、いそいで僧院からつれ戻した。そして、彼女を家門はいやしいが大金持である租稅請負人に褒美として與へた。この租稅請負人は把手に黃金の林檎のついた結構な杖を携へて表側の部屋の一團の中に交つて、あらゆる人々からひどく平伏されてゐた。「彼は當日モンセニュールの邸宅に伺候した人間の中では、少くとも最も現實に即した人間であつた」と（前揭書一〇三頁）

又、彼等の財政的必要以外に、貴族自らの露骨な經濟的利己心も兩者の接合を深めて居つた。即ち貴族はブルジョワジーと並立せんと欲する以上、其の一切の階級的原理に背いて、ブルジョワジーをして、富を、從つて、勢力を得しめた、その同じ產業的營利の手段に訴へることを、自ら初めねばならなかつたのである。これが實現されたものが、かのジョン、ロオの起用であつた。

ロオが、フランスに於て十八世紀の始め貿易會社を組織し、ミシシッピ河岸、ルイヂアナ、東印度其他の商業的開發のため一會社を株式によつて創立した時、フランスの攝政王は其取締役の中に加つて居つた。換言すれば、貴族の代表的人物である攝政王は、一商事會社の社員であつたのである。それぞかりでない。彼は、一七一七　八月

には、貴族等は此等貿易會社の航海及軍務に服するも其名譽を毀損することのない旨を規定した勅令を發布する必要を感じた。ラッサールはこれを評して「當時武勇にして倨傲なフランスの貴族が、全世界を攪き廻はすブルジョアジーの工業及商業企業のために、武裝せる手代となる迄に至つた事を示すものである」としてゐる。（前掲書、一八頁）

此の株式は當時フランス全土が、其ために熱中し、取引所に於ける其相場は、ロオが發行した額面價格の六倍、八倍、或は其れ以上に上つたと云はれたに拘らず、この企業は失敗に終り、その結果上下階級の轉倒はいよ〳〵、顯著になつた。然し、貴族階級のこの熱狂さは、既に當時「一個の物質主義貨幣と財とに對する貪婪飽くなき鬪爭が發展して居つて」、一切の道德理念も一切の階級的偏見もこれに對しては放棄せられた事を明らかに示すものであつた。

かくの如く、貴族は經濟的に克服されて居つたのである。

革命を論ずる多くの著者は、これを別の立場に立つてゐる。彼等の多くは、巴里の貴族と金持とが遞增的に混和したのは、革命勃發の前、いかなる階級に屬するを問はず、すべての人の頭に描かれたところの「民主的精神」の結果と見た。テイヌ、バックルの如きはそれである。

成程貴族、大富豪のサロンに於て、民主的精神に富んだ談話が當時の智識階級を通じて盛んに話されたのは事實である。又この事が階級精神を一つの電磁氣で貫いたことも確かであるが、封建的の古い土地貴族と近世的の新しい貨幣貴族との對立的鋭角を弱めたのは、これ等嵩高な民主的理想ではなくて、今述べた樣な物質的利害關係であつた。

この物質的關係に於てのみ、我々は革命の謎を解く眞の鍵を發見する事が出來るのである。「これ迄何物でもなかつた第三階級」は、この關係によつて、從來强者の不正によつて彼等から奪はれて居つたものを、實際的に、貴族の手から回復する事が出來た。從つて、彼等は無理に其の取戻しを要求したのではない。彼等の實力を以てしたのである。即ち、彼等は、口頭や歎願でそれらの權利の返却を求めないで、その經濟力で買戻したのである。貴族から云はせれば返却したのではなく、賣つたのであり、金の抵當にとられたのであつた。かくした後、彼等は奪然立つて形式上、法律上にその權利の所有を確保し、名實兼合せた一つの社會的存在に迄上つたのである。フランス革命とは、この實行的經過を指示するものであり、貨幣の力、資本の力は、この時代から判然と社會的勢力としての活動を始めたと云つていゝのである。

## 六　貴族は國家の財政に寄食す

借財と農民搾取、その何れによつても、かくの如く尙貧困から救はれ難く見えた貴族は他に何等かの收入方法を持つて居なかつたか。

國家は、ぬかりなく貴族に他の種々な永續的救濟方法を提供して居つたのである。

この永續的救濟は、官職の增加、軍隊の上位の獨占、年金賞與の授與、敎會高位の留保等によつて行はれた。

王は彼の特權によつて、官職を臣下に授ける事が出來た。貴族は最も收入になる官職を其中から掠奪し合つたのである。而も、沒落せる、乃至沒落に瀕してゐる貴族の數は、年一年と增加して居つたのであるから、かくの如き官職も亦、益々增加されて彼等の救濟に資せられたのである。遂には、このために笑ふに堪えない種々の口實が發明されるに至つた。貧困な貴族と相並んで、强大で貪慾な高級貴族がこの恩惠に參加したことは云ふ迄もなかつた。

この官職中で、宮庭官吏の身分は最も希望者の押かけた好閑職であつた。それは、給料が一番よく、その仕事には知識と勞働を必要とせず、其の上にすべての恩惠と一切の滿足との源泉へ直接に導かれる捷徑であつた。このた

めに一萬五千人が宮庭に於て任命されて居つた。しかも其の大部分は名義によつて收入を獲る種のものにすぎなかつた。そして、これには、カウッキーが今日の約一億フランに相當すると考へる貨幣、即ち當時の國家收入の十分の一である四千萬リーヴル以上が、この無益な集團を飼育するために提供された。（カウッキー、フランス革命に於ける階級對立、一八頁）

貴族の官職への侵入はこれに止まらなかつた。

國家行政には種々の官職があつたが、大きく二つに分類する事が出來る。其の一つは、一定の準備教育と多くの勞力とを必要とするものであり、且よつて以て、國家の行政が實際に施行せられてゐる種類のものである。他はこれと並んで、たゞ其れを名義に於て代表することのみを役目とする地位である。最も重要な前者は常に、平凡な給料によつて市民に與へられ、名義丈で勞せずして十分の報酬の手に入る仕事は又常に特權階級のために保留され勝ちなものであつた。十八世紀のフランス社會も亦、この轍から外れてゐない。

軍隊に於ても、同樣の保留が貴族のために行はれて居つた。

軍隊に於ける地位の任命に當つて、第一に顧慮され酌酌されるものは、本人の功績でなければならぬ。ルイ十四世の治下に於ては、市民出の士官も亦、貴族出の仕官と共に軍隊にあつた。功績による原則が略尊奉されて居つたと見てよかつた。尤も、後者は平時に、前者は、主として戰時に顯愛せられたと云ふ區別はあつた。然しこの高級士官の地位も、貴族が官職に飢ゆれば飢ゆる程、益々彼等のために保留され初めた。一七八一年には、士官の地位が古い貴族に限られる勅令迄出る樣になつた。このために、士官たらんとする者は、男系四名以上の貴族の先祖を證明する必要に迫られた。この結果高級士官の地位は市民丈でなく、新貴族となつた者に對してすら拒絕される

に至つたのである。

かやうに、最も困難な任務である下級士官或は兵士は、之を市民から徵募し高級で甚だしい骨折も知識も必要とせぬ地位は殆ど貴族の特權とされて了つたからして、一萬二千人の貴族出身の士官が兵費の大半（年々四千六百萬リーヴル）を費消し、十三萬五千の兵士は僅かに四千四百萬リーヴルで滿足しなければならなかつた。從つて多くの州に於て兵士等の狀態は、支拂は悪く、住居も悪く、二人に一つの寢台しか持たぬ慘なものであつた。其の上フランス風よりむしろプロシヤ風の其の訓練は彼等に耐え難い程嚴格なものであつたと云はれてゐる。

Hartmann は「或は軍隊の中に或は軍隊の外に或は活動し、或は活動しないもの、又は全く引退してゐるもの」一切の種類を同一に見て三萬五千人以上の士官があつた。この三萬五千の中九千五百人が辛うじて實際に聯隊に勤務して居つたと云つてゐる。（L. Hartmann, Les officiers de l'armee royale et la Revolution）

加之農民の窮迫して兵士となるものが多く（三田學會雜誌、第二十三卷十二號參照）、兵士の素質は極端に低下し遂には、これらの兵士をして第三階級の味方たらしめるに至つた。不生產階級の寄食行爲は、こゝに於てもフランス王政を破る一端を開いて居つたのである。

註　前記 Hartmann はフランス革命の進行に對する軍隊の影響を次の如く論結してゐる。

要之一七八七年の五月に於ては、それを支配して居つた法律が二十五年も引續いて變革せられた揚句、軍隊は無組織であつた。訓練は缺け、不秩序は一切の階級を支配して居つた。兵士の貧困はその頂點に達して居つた。士官の運命はほしいまゝにされて居つた。「出仕貴族」は最高位を獨占し、他のものは從屬的な職務につかせられた。そこには前者の感激と後者の失望があつた。すべてこれらの原因が國庫の貧窮と結んだ結果によつてフランスは最早歐洲に於ける第四

位の軍事的國家にすぎなかつた。そして喜んで活動する軍隊の缺如はフランスに最も辛い屈辱を當に受けさせるに至つて居つた。と(p. 22-23))

この現象は教會に於ても同様であつた。

軍隊と同じく、教會に於ても、高給の地位は、其一部分が、從前から明文で貴族に留保されて居り、事實上そうなつて居つた。何となれば此の任命は王の事務であり、王は常にこの地位を貴族に與へて居つたからである。從つて、王の所管に屬する千五百の富裕な扶持附僧職は、僧正、大僧正の地位と同じく、獨占的に貴族の所有になつた。フランスの百三十一名の僧正並に大僧正は、彼等の地位から年々千四百萬リーヴル以上、一人宛十萬リーヴル以上の收入を得て居つた。

僧侶の豪奢の例としては、シュトラスブルグの大僧正ローマン主教が教區として年々百萬リーヴル以上を得王妃マリー、アントアネットの御意を得やうといふ期待で、百四十萬リーヴルのダイヤモンドの頸輪を購つたといふ事實を擧げる事が出來る。

かくの如く、貴族は順次に、教會、軍隊、國家行政、宮庭とむさぼり歩いたにも拘らず、これ等の收入は、尙彼等の希望を容るゝに不充分であるのを知つた。加速度を以てする彼等の負債に對しては、如何なる財源も、これを皆濟するに足りなかつたのである。

そこで王は、一部は、惱める貴族を其の金錢上の困惑から救ふため、一部には、高貴の紳士や淑女の氣紛れを滿足させるため、貴族に對して國家の財政から法外の支出をなす必要を感じた。年金扶與がそれであつた。

古代制度の一豫算表を一讀すれば、王家の二千五百萬リーヴルは、王の宮庭で寄食的貴族を養ふに使用され、其上に三千一百萬リーヴルが血族の諸王、貴族、貴族の手下の年金に充てられて居つた。

中でも、最も多額の年金を受領したものは王族であつた。トウルーズ伯は百七十萬リーヴルの收入を得ながら、國庫を十萬リーヴルも犯して居つた。コンデ公は人も知る莫大な財産の所有者で有りつゝも、二拾六萬リーヴルの年金を食んで居つた。オルレアン公の息シアルトル公は、一七四七年に十五萬リーヴルの年金を受けた。又ルイ十六世の治世には、アルトア伯とプロバンス伯とが、其の負債を支拂ふために、各々三千七百萬、及二千九百萬リーヴルを與へられて居つた。

國家財政上、多額の年金が有害であることは勿論であるが、何等かの功績、或は勤勞に對してそれが扶與されてゐる限りは、幾分の赦すべきものがある。然し、それが、寵妃の家族、友人に、はてはその信任する人々の娘や其の婚資に迄及ぶに至つては、些も其合理性を見出す事は不可能になる。年金の不當な浪費の例を擧げれば、マリー、アントアネットの特別の寵を蒙つてゐたポリニヤック家は、恩給丈で七十萬リーヴルを得ポリニヤック候は、其上終身年金十二萬リーヴルを受け、土地購入のために一時金百二十萬リーヴルを贈られてゐた。更に甚だしい一例をあげると、一理髮師はアルトア伯の娘が、まだ結髮する年齡に達しないで死去した時、時々理髮のために奉仕したといふ理由で千七百リーヴルの年金が給與せられた。かくして一七七九年から一七八七年に至る八ケ年間に「赤綴年金表」(Livre Rouge)によつて支拂はれた年金總額は實に八億五千八百八十二萬四千二百五十リーヴルに上つたと云はれてゐる。

モンテスキューは、年金受領者の過多に關して次の如き評を與へてゐる。曰く

「君主國、及共和國に於て、大きな賞與は其衰亡の徵候であると云ふのが一般原則である。何故なれば、一方に於

て名譽の觀念が最早多くの勢力をもたず、又他方に於て市民の品質が劣惡になつたことを證明するから」と。（同上第五篇十八章）

ローマの最惡の皇帝は最も多くを與へた皇帝であつた。最もよき皇帝は儉約家でなければならぬ。然るに、フランス歴代の王は最も浪費する王であつた。王のかゝる態度は、貴族を救ふ事に於て、又貴族との關係を不正に親密ならしむる事に於ては、甚だ有効であつたが、君主政其のもののためには、換言すれば、王のためにも貴族のためにも、又最も重要なことには、國民全體のためにも、甚だ不幸なものであつた。

就中、この事は、國王自身に對して最も不幸であつた。何故かなれば革命の勃發は、王をこれらの貴族から全く無援孤立の狀態に置いて、充分に彼をして忘恩背離の悲しみを味はせたからである。我々は、革命が勃發した時是等の貴族等がどんなに彼等の國王と女王とを無援の地位に捨てゝ、叛亂した人民に對し彼等の財産と特權とを守るために、外國軍の侵入を促すところの脱走を急いだかに於て、彼等の價値を知る事が出來る。クロポトキンは云ふ「彼等の價値と彼等の性格の尊貴とは、彼等がコブレンツ、ブラッセル、ミイトウ等に建設した移住貴族等の殖民地によつて評價する事が出來る」と（P. Kropotkin, The great French revolution, translated by, N. F. Dryburst. p. 17）

然し、宮庭貴族の全部が、或は貴族のすべてが、蜜を食んで働かぬ雄蜂の如き生活をして居つたのではない。一部の有能有才の貴族はヴルサィュやパリーに閉ぢこめられずに、一年の生活の中の一部をパリーに、他の一部を已が居城に送つて、時には有識者と語らひ、十八世紀の哲學を含味熟讀したのである。我々は、貴族の陣營内部に於けるこのいくつかの組成分について、次に述べなければならぬ。

## 七　宮廷貴族と鄉土貴族

これ迄は、一概に、貴族を國家と國民の内に住居する組織的な掠奪者として述べて來た。

然し當時の貴族がすべてかうであつたと判斷する事は正しくない。我々はこれらの貴族と全く異つた、否、全然反對の立場、反對の利益を擁護する他の一國の貴族を發見することが出來る。但し、この種に屬する貴族は、其數に於て前者を凌駕して居つたが、其勢力に於ては、前者よりも遙かに劣つて居つた。即ち貴族階級中の除外例であつた。何となれば、或る階級を代表するものは、常に其の中の勢力すぐれたる一部であるからである。我々が十八世紀のフランスに於ける貴族と云ふ時、常に奢侈淫樂に涯なかつた貴族を想像するのは、このためである。

前者を、我々は便宜上宮庭貴族と名づけ、後者を鄉土貴族と名づけて其の區別を明らかにしておかう。

前者即ち宮庭貴族は、早くから其の領地を顧みず終始パリーに住み、新しく建立されたヴルサィュの神殿に參拜或は參籠し雅やかな風に染んだ身には、今は枯草の香について語る事すら潔よしとせず、偶々歸鄉する時があれば狩獵の姿をして馬上に鞭を鳴らし、子の如かるべき農夫の尊い收穫物を哀れにも蹂躙した。彼等は搾取の權利のみを田園に殘し魂は都の灯の下に亂舞させて居つた。この事は「一七八九年のフランスに於ける農民階級」を論ずるところに於て既述した通りである。

反之、後者はかゝる態度を極度に憤慨する立場を持した。ブルターニュの一部に於て、又ヴアンデーに於てそうであつた如く、封建制度が猶十分の力を持續してゐた經濟的に云へば後進した地方に於て、後者即ち鄉土貴族は有力な地位を樂しんで居つた。故に言葉を換えて云ふなら彼等は、前者と異つて、城の中に農民の間に伍した一箇の高級農民であつた。前者と異つて、負債に追はれるでもなければ、費用のかかる贅澤を事とするでもない彼等は、

小作人の義務や負擔を殖すことに於て、又無分別に彼等から徵發することに何等かの理由を求めて苦心する必要はなかつた。殊に、貧困な貴族には高級農民である所か普通農民と同一か、甚だしきはそれ以上の經濟狀態にあるものも珍らしくなかつた。例へば、センシイ伯の如きは年千二百リーヴルの收入で七人の子を養つて行かねばならなかつた。彼等は全く農民と同一の利害關係にあつた。

思ふに、同一の土地に住居して共同生活を營むものの間に、一種の同情が起り、その同情によつて其共同生活の結帶がいよ〳〵固められ、それ以外の掠奪者に對して强く一致する事は何等の不思議でもない。從つて、この種の貴族と農民との間は決して不和であり得ない。彼等が寧ろ、よりよき領主として農民から崇拜され、彼等自らにもよき農夫と自惟して居つた者の多かつた事は想像に難くないのである。

恐らくリアンクール公の如きは、この種の典型的の貴族であつたと云ふ事が出來やう。アーサー、ヤングは公の農村に於ける施設について次の如く書いてゐる。

「リアンクール近傍の一村に公爵はリンネル及綿絲と纖維の交織工業を起した。これは非常に有望視されてゐる。そこには、二十五の織物機械があり、且それ以上の製造設備もある。この織業に對して紡績も又起されてゐるから、それが遊んで居つた多くの人に職を與へてゐる。何故遊んで居つたかと云ふのに、田舍には盛んになる見込はあるのだが、何の工業もなかつたからである。かやうな努力は偉大な賞讃に價ひする。これと關聯したものは次の時代に働く習慣をつくるための公爵のすぐれた計畫の貫行である。貧民の娘達は有益な產業教育を受ける設備に收容されてゐる。彼等は宗教的に教育され、讀み書きと紡ぐことを教へられてゐる。彼等は嫁入する迄此處に置かれ、それから、彼等の稼高の規定された部分が婚資として彼等に與へられる。....」。（Arthur Young's travels in France, p. 83）一八一六年にリアンクールを訪問した一フランス旅行家 Vaysse de Villiers は此の眞の人道主義者によつて行はれた進歩のよろこぶべき狀態を畫いてゐる。多くの產業が樹立され、農業は今迄この地方に知られてゐなかつた多くの野菜の外にホップ、ブドー、大麻、亞麻、菜種の移植によつて繁榮してゐると。

婦人にも、この種の典型的人物があつた。同じくヤングは、リアンクール公夫人の妹であるポン夫人について次の如く記してゐる。

「この伯爵夫人が一大農夫であつた事を發見した私の驚駭はどんなであつたか。パリーの一切の快樂を樂める丈の若さをもつ一フランス婦人が彼女の田舍に住んで、自分の農場の世話をしてゐるのは見るべからざる光景であつた。彼女は恐らく、歐洲の誰よりも多くムラサキ、ウマゴヤシ、ウマゴヤシ（二百五十アーペント）をもつてゐる。彼女は、最も寬いだ愉快な態度で、ウマゴヤシと、乳場の知識を私に與へた」と。（ibid. p. 88）

リアンクール公の如きは、寧ろ宮庭貴族の異例と見るべきであらう。（Henri Sée, op, cit, p. 86）

然しその農村に對する熱情に於ては正しく鄉土貴族の中に入れられるべきであつた。

總體的に云へば、これら鄉土貴族の大部分は、奢侈な都市生活に耐え得ず又自らそれを好んでも經濟上許されない貴族であつたのである。この事からして、我々は次の如き觀察を下すことが出來る。即ち遲れた封建的な地方と開化の程度の高い地方とを比較して、全く反對の事情の存在して居つたことである。

もつと詳しく云ふならば、進んだ地方に於ては、王の官僚政治が封建諸侯の行使して居つた行政上警察上、裁判上の重要な權能をすべて繼承して了つた。そこで、そこの封建的貴族は自己の領地の秩序や安寧については何等心配する必要を感じなかつた。殘る所のものは、たゞ領地を搾取する仕事丈となつて居つた。

之れに對して、舊い封建的諸洲に於ては、依然として領主は彼等の領地を治めて居り、領地の秩序と安全に心を配り、臣下の間の訴訟を判定し、犯行や違度を罰して居つた。かゝる事情が存してゐるが故に、これらの領主は、進んだ地方の領主の如く無用な搾取者、有害な農民寄食者たり得なかつた。共同生活を營む以上、守らねばならぬ共同の利害と愛著は當然に生れた。然り、この貴族は、彼等の田舍へ農民を掠奪に來る敵、即ち、王の收稅吏の行爲があまりに酷である場合には、進んで彼等を驅逐した少なくない事例を我々に提供してゐるのである。

鄉土貴族とはかくの如き人々であつた。

この種の貴族が王權に對して無制限に服從しやうと考へてゐなかつたのは不思議でない。彼等は、一言を以てするならば、所謂參伺せざる鄙びた貴族である。

前述した如く、軍隊、敎會、行政あらゆる方面に、幾重にも搾取の網を張りつめてゐる宮庭貴族は、王權が絕對であればある程、それ丈甘く農民及一般市民から搾取出來、王權が無拘束であればある程、それ丈多く國家の必要を充すべき公共の收入を奪つて自分の用とする事が出來るからこれを歡迎するが、宮庭の恩寵からは遠ざかつてゐるが故に、そこからは何物も期待する事が出來ず、就中、重要な事には、稅金の捩子が緊められゝば緊められる程彼等の臣下は貧窮になり、其上、彼等の裁判上、行政上の權力が王の行政組織によつて中央に回收されゝばされる程自分の權力と威望とを喪失して行く鄉土貴族がそれを快しとする筈はなかつたからである。

彼等は、自己を王の從僕と思はず、その同格者と感じて居つた。彼等にとつては、王は封建時代と同じく領主間の最大なるものにすぎなかつたのである。加之國庫の新しく增加する要求のために工夫せられた稅金が、以前の免稅資格者たるこの貴族に及ぶに至つては、それを宮庭貴族と異つて、利益の分け前に加はる事なしに支拂はねばならぬ彼等は、騷然として、國家財政の節約、財政制度の改革、身分代表による其監視を叫んだのである。

かくの如く、貴族は二つの陣營に分裂して居つたのである。

カウッキーは、この階級內部の反目から、次の如き二つの特異なる事情を發見してゐる。

その一つに曰く、若し、過去の諸黨を、それが代表する階級利益に從つて判斷せずに、それらの傾向と近代的標語との外面的一致によつて判斷するならば、フランスの最も遲れた諸要素が、進步的要素として、自由主義派の人々として現れたといふ事である。

その二は、このおくれた粗野な要素は、一面に於ては、絕對的王制の代りに制限王制を要求することによつて、第三階級の要素と一致した要求を持つて居つたに拘らず、他面には、其傳統的風習と性質とによつて、全く第三階級と敵對する立場にあつたと云ふ事である。（カウッキー、前揭書、二四頁）。

この事は、鄉土貴族が第三階級と一致したのは、偶然の變則的のものであつて、其本意に於ては、進步的でも何でもなかつたと云ふ事を明示して居つたのである。恐らく、かくの如き事例は史上亦少なくはないであらう。若し、彼等にして、進步的であるなら、開明な時代透視力を有して居つたならば進んで第三階級と結んで自己の階階的努力を擴張すべきであつた。然るに、これを行つたのは、彼等鄉土貴族でなくして、よく世間を見步いた一部の勇敢なる貴族であつた。ネッカー夫人のサロンから排斥された無作法な貴族ミラボーの類がそれであつた。私は、これを貴族の第三番目の分子として前二つの貴族から區別しやう。

この三番目の貴族について語る前に、暫時、宮庭貴族と鄉土貴族とが、町人階級と宗敎と道德とに對する感情の相違について語らう。

註　本章は主として、カウッキーの「フランス革命に於ける階級對立」による

## 八　生活と思想を異にする鄕土貴族と宮廷貴族

鄕土貴族は町人階級に對して、恰も農夫が都會人に對する如く、自然經濟人が貨幣人に對する如く、又無敎育者が敎育者に對する、遺産に生食する者が、闖入的の成り上り者に對する如き憎惡の念を抱いて居つた。

此の點に於て云ふならば、都會の貴族は、前述した如く、町人階級に甚だ寛大であつた、何となれば、その物質的利害關係が都會の貴族をして、貨幣貴族たる町人階級をそのサロンに招き結婚を取交し、民主的精神の滿足なる表現を見せる事を惜まなかつたからである。

社交的範圍に於けるパリ貴族のこの民主的態度が鄕土貴族の心に合はぬものであつた事は勿論であるが、この外宗敎道德及哲學に對する彼等の同樣な民主的態度は恐らく、より以上に兩者を離反せしめるものとなつて居つたであらう。

猶未だ昔の封建的生活を送つてゐる地方貴族は、當然其生活樣式に相應する思想形式、即ち祖先傳來の宗敎と道德を尊重して居つた。

之れに對して、前述した如く、封建的制度の殘物は農民を搾取し壓服せしめるための手段としての價値しか發見しないパリーの貴族にとつては、封建制度とは、多くの場合、彼等の稱號とそれに相應する收入しか意味しなかつた。

宮廷貴族はこの立場から宗敎と道德を見たのである。從つてその歸結は明白であつた。

田園に住む、貴族は宗敎は「無智なる人民」のために極めて必要なるもの、宗敎なしでは彼等は暮らし得ぬものと定義を下して居つたのに對してパリーの貴族は好んで宗敎を嘲笑した。攝政の母、ラ・バランチは、一七二二年に「僧侶を問はず、眞の信仰を有し、或は神をさへ信ずるものは、パリーに幾人もゐないと信ずる。眞に戰慄すべき事態にある」云々と。サロンに於ける宗敎家の地位は誠に困難なものであつたと云はれてゐる。

次に、自由思想と常に提携して進行するものは舊道德の沒落か、或は道德の頽廢である。

奢侈を事とした貴族の家庭には、當然甚だしい淫樂の風が表はれた。封建的領主にとつては、彼の家政と、それを司る主婦の貞淑とは非常に重大な意義を持つて居つた。規則的な家政、鞏固な結婚、嚴格な躾これらは不可缺の家庭的諸條件であつた。

然るに、奢侈遊樂以外に仕事をもたぬ廷臣等にとつては、結婚と家庭とは決して重要な事務事項ではなかつた。サロンに於ける主人である主婦の最も注意をひかぬ男は夫であり、又夫の最も注意に値しないものは其妻であつた。夫婦はかやうな價値評價を相互に下し合つて居つた。從つて小供の家庭に於ける存在と愛撫とを要求する資格は稍もすると、此の父母によつて忘却された。

子供が兩親から愛撫される事は恰も、特別の恩寵の樣に考へられて居つた。どの子供も、兩親の前では無言でゐなければならなかつた。故に、或る人は次の如く云つた。「この社會の天女達の中で、自らして子供があると云ふ事を、その擧動や態度に現はしてゐる奥方を、ただ一人でも見出す事は難かしかつた」と。實際ただ厄介な生物をこの世の中に生み出すと云ふ丈の行爲を別にすれば、母などと云ふものは流行社會には知られてゐなかつた。さう云ふ流行ばなれの赤ん坊は、毎朝十五分間も其母によつて玩具にされた後で、百姓女にあづけて育てられたのである。

それであるから、六十才にもなる夫人が二十才のものの樣に食事をしたり

する事が出來た。ルソーの「エロイズ」や「エミール」が成功した理由はこゝにあつた。

この年老ひながら甚だ若い夫人に對して、一度眼を農園の間に轉ずると、そこには、若くして年老いた女の土にうごめいて居るのを見る事が出來た。この奇怪なる對照に驚いた外人アーサー、ヤングは驚駭の筆を次の如く走らせてゐる。曰く「一七八九年、七月十二日、私が牝馬を馴らすために長い丘をのぼつて居つた時に、一人の貧しい女と一緒になつた。彼女は時勢をこぼして居つた。そして悲慘な國だと云つてゐた。――この女は、離れた所から見ると、六十才か七十才に見えた。勞働のため、彼女の姿はあまり背が曲り、そして、顏にはあまりに皺が出來且あまりに硬ばつて居つた。――然し彼女はたつた二十才であづた」と。一切の貴婦人は、かやうに家庭道德を尊守するにはあまりに若やいで居つた。家庭よりも、社交が各人の關心事であつた。從つて、人々の性情が恣に行使されたのは當然であつた。「自由戀愛」のすぐれた典型は、王公によつても貴族に明示されて居つた。

然らば、最後に、この貴族等は當時の所謂哲學思想なるものに對して如何なる態度を持して居つたであらうか。人の云ふ如く革命の近づく頃貴族の大部分は、自由と平等のこの新思想に感染して居つたらうか。當時の高級貴族等は、疑もなく、著述家思想家を彼等のサロンに招き、人類愛と正義の理論を屢々耳にし、且其感情に共鳴して居つた。この事に關して、次の如きセギュール伯の甚だ興味ある一句は世人の屢々引用するところである。曰く、古典風の可笑しい投石兵、我々の先祖の封建的尊大さ、及嚴めしい宮中の儀式すべて我々に古いものは、我々に退屈な、そして笑ふべきものの樣に見えた。我々は、才氣があり大膽な文人の云ふ哲學說に熱心に從ふ樣になつてゐるのを感じて居る。

ヴルテールは我々の心を誘つた。ルソーは我々の魂を感動させた。我々は祕やかな歡喜を感じながら、我々には陳腐で可笑しく見える古い基礎が攻擊されるのを見た。我々は、平民哲學の甘味と、貴族の利益とを同時に味つてゐる」と。

然し、これは當時の流行を示すものであつて、彼等が眞の哲學の弟子たることを意味するものでなかつた。貴族階級は、就中、彼等が享有する特權に手を觸れずに置くことを考へて居つた。さればこそ、平等と自由への改革を目指す最も有名、有能の士、ネッカーやチュルゴーは彼等の忌避する所となつたのである。

何人が眞に哲學の使徒であつたか。鄕土貴族がこれを解するには、あまりに粗野であり封建的であることは既に明白である。貴族階級の中で、この哲學を理解し追從しうるものは、主として、次に述べる第三の貴族等にすぎなかつた。私はこれを民主的貴族と呼ぶ。

## 九　第三の貴族

前述した如く、地方貴族は、其奢侈、快樂、宗教、搾取、階級的混和性の諸點に於て、都會貴族に全く相反する立場を取り、且これに激憤を感じて居つたのであるが、後者は又後者で、前者の無智と未開さとを非難して止まなかつたのである。兩者のブルジョアジーに對する見解の如き、一は其物質的利害から之れを迎へ、他は其未開によつて、これを斥けて居つたが、何れも、心からブルジョアジーと同化するものでない事に於ては等しかつた。

要之、彼等はいかなる種類を其內容に有して居つたとしても、貴族たる性質に於ては異つてゐなかつた。第三階級に對する特權階級としての對立的存在、これが彼等の本來の姿であつた。

然し、ここに述べる貴族は、その何れにも屬してゐない貴族であつた。貴族と人に呼ばれるかも知れないが、精神に於ては全く第三階級の人々であつた。この貴族にして、我々は初めて、貴族ならぬ貴族を認める事が出來る。

この貴族は、前二者に對して全く新しい見地を保持した。即ち、宮庭貴族の如く、搾取に加擔せずしかも地方貴族の如く、無智と粗野ではなく、寧ろ彼等の敵であるブルジョア的見解を固執した人々であつた。鄉土貴族とブルジョアジーとが其要求を一にした場合は、最も遲れた要素が偶然の事情に左右されて、進歩的な要素と一致したのであるが、この種の貴族とブルジョアジーとの場合には、全く眞底からの結合であつた。

其性質から云へば、この典型に屬する貴族は、下級の財的に破滅した貴族が、教育で生活する事も出來ず、軍隊には不適當であり、且宮庭に於て出世出來ぬか、或は不興を蒙つた人々であり、其要求と理想から云へば、宮庭貴族の腐敗を厭ひ、平民の貧窮に同情し、且鄉土貴族の粗野を快しとせず、支配階級の沒落を不可避と認めた人々であつた。かゝる見解を有する彼等であるから、當然、第三階級の味方となり、代表者となつた。三民議會に於て彼等は、第三階級選出の議員として議會を左右したのである。彼等は、又、第三階級が其意識を增大するに從つて增大して行つた知識階級の代言者である文學者、パンフレット著作家、新聞雜誌記者とも混合し、其職務をも自ら行つたのである。

かくの如く、貴族中の最も聰明であり、最も多く元氣と果斷とを有して居つた彼等が、次第に第三階級的意識に混入して行く事によつて、貴族の一角は崩れ、其階級的力を著しく減殺されて居つた。

我々は此の點からして、貴族にとつて最大の危險を構成して居つたものは、第三階級の彼等に對する敵視ばかりでなく、彼等內部に於ける利害の連帶觀念の缺如であつたことを知る事が出來る。彼等の間の分裂の最も著しい例證として、アンリー、セエはブルターニュに於ける州會とパールマンとの抗爭を指摘してゐる。(op. cit., p. 92)

貴族の敵である第三階級があれ程粗雜な分子を包含して居つたに拘らず、革命に於て階級的優位を占め得た理由と古代からの特權と富と宮庭の支持を有してゐながら、貴族が一七八九年以來の爭鬪に無殘の敗北を見た理由とはここに存して居つた。第三階級には、特權に對して共同の利益を保護する眞のフランス國民であると云ふ强い階級的自覺が滿ち〳〵て居つたのであつた。

## 十　結　論

以上述べ來つた如く、貴族は、其進步的な一部を省いて、其曖昧な封建的寄食主義によつて、其鮮明な君主政的寄食主義によつて、其財政的不道德によつて、フランスの一切の活動力を害し、脅かし、恰もフランスの眞の支配者の如く振舞ひ、自らもフランス王政をも滅亡に齎らしたのである。

故に、シイエースは云ふ「フランス國家が君主制度の下にあると考へるのは大なる誤謬であることが明らかであらう。我々の年代記から、ルイ十一世とリシュリーの數年及ルイ十四世のある時――この時には完全なる專制政治が行はれて居た――を除いて見よ。然らば諸君は、朝臣の貴族政治の歷史を讀むといふ感に打たれるであらう。大臣の職の新設、廢止、任免及種々なる地位の新設も、其分配も、偏へに朝臣の自由である」と。

人民も亦、王と貴族とを全然離れたものとして考へて居つた。人民は、貴族を打倒せよとは叫んだが、王を廢す意思は初めには全然なかつたと云つてよかつた。何となれば、一七八九年六月の革命直前の輿論は日を追ふ每に沿々共和政へと狂奔して行つたにも拘らず、尙王國は一君主政治でなければならぬ、或は少なくとも、一人の王がなければならぬと云ふ告白をしてゐるからである。(Arthur. Young, op. cit, p. 181)王も亦貴族に對しては、利を俱にしながらも、其警戒の眼を弛めてはゐなかつた。善良であるが不幸なルイ十六世すらも、貴族階級以外に王位に對する競爭者ありと見てゐなかつた。そして彼の先祖と同樣に中流及下流の階級こそ、王位を支持する最も確實な

ものであると確信して居つた。然し社會制度の崩壞は、善良にして臆病な一人の王に何事をもなさしめなかつた。最後に貴族について云ふべき事は、彼等が全く當時の人心の歸趨を察知して居なかつたと云ふ事である。察知し得なかつたと云ふより、寧ろ、そんな事は彼等の齒牙にかゝらなかつたのである。サロンに於て知識階級の間から生れた、彼等にとつては甚だ危險な「民主的精神」と云ふものを、さも珍らしげに弄んで、自ら住居してゐる舊き建物が、其魔の如き玩具によつて、次第に倒されつゝあつた物音に氣が付かなかつた彼等を想定して、我々は驚異の感に打たれざるを得ない。

試みに、一七八九年六月二十二日に當るアーサー、ヤングの日記を見たまへ。ヤングはこの日、宮殿でリアンクール公と共に、貴族及下院の代表者の一大集團と會食した。この中には、オルレアン公、ロデイ僧正、シイエース、及サン、エテイアンヌも交つて居つたから、刻下の大問題がこれ等種々なる階級の人々の上に如何なる印象を與へてゐるかを知るに最も適當した場合であつた。

街上及聖ルイ教會に於ては、時態の重大さを面に示す程人々が憂慮の樣を示して居つた。從つて、日常しきたりの挨拶や禮儀などは、一切人の注意をひかなかつた。然るに、ヤングが會食したこれ等の高位の人々の印象は、ヤングを全く驚かしたのである。何となれば、何事か異變が迫りつゝあると云ふ事を、よつて以て推定し得る樣な面持をしてゐる人は、三十人の中五人もなかつたからである。彼等の會話に於ても、彼が豫想して居つたものと甚だしく異つて居つたからである。彼等は食ひ、飲み、座し、歩き逍遙し、作り笑ひをし、微笑し、そして、ヤングをして彼等の無感覺に驚駭させる程元氣な無頓着さを以てしやべつて居つた。恐らく長い間の習慣からして、上流社會には、いかなる場合でも強いて無頓着さを裝ふ風が養はれたのであらうが、ヤングは、卒直であり不愛想な世俗な人々からは全く區別された彼等のこの圓滑錬磨された心持の表現方法からは、遂に何が彼等の眞意であるか知り得なかつた。

ヤングの此の手記は、上品であるが不幸な貴族が、王政の危機に際しても何等王政を救ふ策を持たなかつた事を示すものであつた。この彼等の愚鈍と不敏とは、三民議會の議決を階級によつて爲さんと主張する事によつて愈々明白に民衆に暴露されて了つた。

特權階級は遂に輿論の代表者ではなかつた。彼等は十八世紀末に於ける政治家たるの資格を全く缺いで居つたものと云はねばならぬ。誠に、ジャン、ジョンスの云ふが如く「貴族はその曖昧な封建的寄食主義によつて、其鮮明な君主政的寄食主義によつて、其不道德によつて、フランスのすべての活動力を阻害し、或は脅やかしたのである」。(J. Jaure's Hisotoire socialiste de la Revolution Franesaise tome. I p. 39) さればこそ、この阻害されたフランス社會の全活動力を回復促進しうるブルジョアジーが、彼等に代つて、新時代の王となつたのは當然すぎる程當然であつた。一言にして云へば、遙か革命前に、ダルジャンソン侯が Pensées pour la réformation de l'Etat に於て公言せし如く、「大領主に屬するものは完全に亡ぶべきであつた」。これを人呼んでフランス革命と云ふのである。